



学校法人
鎌倉女子大学

時代に身をおく教育活動

—平成27年度「全学教職員の集い」／4月1日（水）理事長講演より抜粋—

昨年12月22日、中央教育審議会が「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」を答申しました。それは、現行の知識量を問うことを中心とした「大学入試センター試験」を廃止して、課題一解決型の知識の汎用能力を問うことを中心においた「新テスト」を導入しようとするものです。

目下、文部科学省内において、平成31年度からの「高等学校基礎学力テスト（仮称）」、また32年度からの「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の実施に向けて、制度設計も含めた総合的検討が始められています。

特に今回の一連の改革の眼目は、これまでのような単なるテスト形式の変更というに止まらず、「一体的改革について」という答申のタイトルにも見て取ることが出来るように、テスト改革を中心にして、「高等学校教育の改革」と「大学教育の改革」とが抱き合わせて検討されているところにあります。

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」の三分野を重点化し、「教える内容」は元より「教える方法」を含む抜本的改革が見込まれているところから、これまでの高校・大学の先生方の授業の形式からして相当な変更を迫られるものとなるでしょう。特に中学・高校の授業の在り方は、非常な変更を迫られる可能性があるように思われます。

今年の1月16日、「文部科学大臣決定」として文科省が発表した「高大接続改革実行プラン」には、こうあります。

先ず「高等学校教育の改革」については、「義務教育までの成果を確実につなぐとともに高等学校教育の質の確保・向上を図り、生徒に、国家と社会の形成者となるための教養や行動規範、自分の夢や目標をもって主体的に学ぶ力を身につけさせる」と。

次に「大学教育の改革」については、「多面的・総合的な評価等の大学入学者選抜改革と連動して、多様な学生が切磋琢磨し相互に刺激を与えながら成長する場を創成するとともに、大学教育の質的転換を断行し、学生が高等学校教育まで培った力をさらに発展・向上させ、予測困難なこれからの社会に出て自ら答えのない問題に対して解を見出していく力を身につけさせる」と。

如何にも無味乾燥な霞が関文学ではありますが、しかしこの無機質な文章に基づいてさまざま企図が制度化されていく時、これを肯定的に受け取るか批判的に受け取るかという次元を超えて、私たちの日々の教育の在り方に大きな問い直しを迫ることになるでしょ

う。

鶏と卵ではありませんが、新テストの内容は、新しい教育によって培われる能力を正当に評価出来ることが求められるでしょうが、逆に新しい教育の内容は、新テストに対応出来る能力の形成へと差し向けられることにもなるでしょう。簡単にいって、テストの内容と形式が日々の教育の内容と形式を規定することになるということです。「いや、テストのための勉強ではないはずではないか」と、それは確かにそうだとしても、しかしそのソモソモ論を今ここで語ることは、児戯に類する話であって、今回の改革が孕む問題性に実際対処するものとはならないでしょう。例えば、日本の中学・高校の英語の授業が何故文法中心になるのかといえば、それは、大学の入学試験が文法中心だからですよ。試験というものは、それほど大きな影響力をもつ。私たちは、責任ある教育を預かる以上、その認識はもっておかなくてはなりません。

文科省の専門家会議で本格的に決められてくる改革の内容をしばらく注視していかなくてはなりません。ある時点で大学、高等部、入試・広報センターを中心としたプロジェクトチームを編成して、本学も本格的な検討に入らなくてはならないでしょう。特に中・高等部の「世代間主導體制」を担う、国・社・数・理・英といった重点科目の授業モデルを提供してくれている各教科主任とベテランのスーパーバイザーの先生方は、それを想定しての授業設計・授業方法等を研究し始めておいて下さい。

学校を取り巻く環境は誠に激しく、多事多難です。私たちは、教室に身を置くだけでなく、時代の中に身を置いていることを忘れてはならないのだと思います。

[>前のページへ戻る](#)